

府北部漁業関係調査まとめ

2008年7月24日 日本共産党京都府議会議員団

- 1 党府議団は、6月17日、7月16日、7月19日と京丹後市、舞鶴市の漁業関係者や団体を訪問し、実情と要望を聞いた。吉田さゆみ5区代表、地元市議団も参加した。訪問先は、漁業団体役員、底引き網船船長、イカ釣り船船主、一本釣り漁師、遊漁船経営、水産会社などの方々である。
- 2 次のような深刻な実態がこもごも出され、緊急に対策が求められていることが浮き彫りになった。
 - (1) 原油の高騰が漁業を直撃している。軽油はこの2ヵ月半で4回値上げされ、5月に1リットル90円だったものが110円～120円に（かつては42円だった）。「原油高騰対策として、底引き船は軽油から重油に変えたところも。スピードを落としたり、船底の貝殻落としなどの工夫もしているが、自分たちの努力ではもう限界」と語られた。イカ釣り船一晩で200リットルの軽油を使用するが、この原油高では「油代も出ない」と出漁できない実情も語られた。「4キロ沖合の定置網を数隻で毎日往復するのにかかるA重油代が、月40万円。2年前は30万だったから、年100万以上の経費増になっている」実態も出された。「原油高で採算がとれない。廃業を考えている」という方も多かった。
 - (2) 船外機のガソリンには道路特定財源である揮発油税が上乗せされている。サザエ・アワビ採りや一本釣りは多くはガソリン船外機だが、「1日に18リットル使用することもある。採算が合わず、免税してほしい」という声は切実だった。
 - (3) 燃油とともに、網、発泡スチロールなど、あらゆる経費が上昇している。「網も石油製品で値上がり、修理も業者に出すと数十万かかり、休漁期間中に自分でしている。」、「発泡スチロールの箱は120円だったものが200円に」、「春先のワカメの乾燥に灯油を使用しているが、20グラムの袋を300作るのに60リットル使う。1袋170円で出荷だが、この原油高では200円を割ると採算がとれない」との声もあった。
 - (4) これら経費増の一方、魚価は10年来変わらず、むしろ下がり生産意欲をそいでいる。種類によっては安くなっているものもある。「ハマチ1本の浜値が30円ということも。小売りでは600～800円。輸入物との競争もある。燃費高でただとっしょ、やっつけられん」という声は深刻だった。
 - (5) 京都は定置網が多いが、他県の巻き網船団が魚を根こそぎ持っていく影響も大きい。「沿岸の魚群を水中灯で沖へ引きよせ、一気に網を入れて漁獲し、水揚げする。定置網の漁獲減につながっている」という指摘もあった。
 - (6) 府北部は、漁業と観光が一体になって地域を支えてきたが、このままでは漁業に新規参入のIターン者や若い担い手が前途に希望を失いかねず、地域の崩壊にもつながる。
 - (7) 政府の緊急対策は、実情に合っておらず、使いにくい。実効ある対策が求められている。「国から半分出ても、設備投資なんて、いまの状況ではできない。エンジンは10年が耐用年数だが、オーバーホールしながら20年はもたす。それが過ぎたら、廃業かな」というリアルな声があった。

以上